背に吹き抜けるは君の風/銀魂/沖神

槻夜 七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
背に吹き抜けるは君の風／銀魂／沖神

【Ｎコード】
Ｎ１０９９Ｆ

【作者名】
槻夜　七瀬

【あらすじ】
銀魂高校にて。いつも通り喧嘩をして暴れまくり、罰として居残り掃除を言い付けられた沖田と神楽。時間も遅くなって、家の前まで一緒に帰ることになったのですが…

００１（前書き）

※沖田さんが別人格？になります。記憶喪失です。
※神楽ちゃんのキャラがちょこっと違うかもです。
※３－Ｚです。（注意事項かこれ
以上のことが大丈夫な方はどうぞー！

ＰＶ数１９０００人突破ありがとうございます！
全て皆様のおかげです！
これからも宜しくお願いします＾＾

001

ある日の出来事だった。

何でもない、いつも通りの一日で。

「ほアちゃァァァァァァ！」

オレンジ色の頭が、その小さな身体ごとふわりと舞い上がり、恐ろ

しいスピードで落下してくる。
勿論構えは跳び蹴りであり、標的も決まっていた。
「ちょ、ちょっと神楽ちゃん！？　あぶなッ…教室が目茶苦茶になっちゃうでしょっ！？」
その勢いに負けじと声を張り上げる眼鏡――志村新八。
けれど彼の制止も虚しく、彼女の攻撃は更に激しさを増す。
「ブベラッ！」
既に数人が投げ飛ばされている状況で、飄々と攻撃を避け続ける少年が一人。
「どこ狙ってるんでィ？」
動く度にサラリと揺れる栗色の髪。赤みの強い瞳をした少年――沖田総悟は、喧嘩相手であるチャイナ娘を挑発する。
「やめろ、総悟！　お、おい今日はいつもよりも凄まじいなお前らの喧嘩！」
仲裁しようと試みる目つきの悪い男――土方十四郎は、しかし、その凄まじさにも慣れたようだった。
授業開始のチャイムが鳴る。
勿論、喧嘩をしている最中の二人には聞こえるはずもないが。
そのチャイムが鳴り終わると同時に、教室へ入ってくる男がいた。

白髪天然パーマ。死んだ目。咥え煙草。だらしなく着た白衣。
この要素を持っている彼を見て、誰が教師だと言えるのだろう。

「うるせぇぞ、てめーら。猿山の猿かコノヤロー…ってコラァァァァ！　何これ、どーゆー状況！？　半壊じゃん、俺らの教室半壊じゃん！」

怒声でつっこむと、眼鏡にヒビが入った新八が軽く説明をした。

「――成る程な。そんなどーっでもいいことで教室半壊？　誰か止めろよ、俺痛いのも面倒臭ェのも嫌いなの」
「そんな、こういうときは教師が止めるべきでしょ？」
事実、もう既に何人が吹っ飛ばされたか解らないのだ。
そんな危険なことを生徒にやらせるというのか。

「わあったよ。やりゃいいんだろ、やりゃぁよ」
薄っぺらい返事をした後、銀八は良く通る声で呼びかけた。

「おいィィィィィィィィ！　いつまでやってんだよ、そこの猿二匹！　空気読めよ、先生来てんだよもう！　おめーら今日は居残ってぶっ壊した教室の片付けしろよ！　良いな！？」

――ぴた、と猿二匹の動きが止まった。

先程まで互いに向かっていた怒りの声が、今度は銀八に向かう。

「何で私もアルか!?　こいつが全部悪いアルよ!?」

「ちょっとお前黙っとけ。せんせー悪いのは全部こいつでさァ。俺は何にもしてません」

「ふざけんなヨ！　元はと言えばお前が私のタコ様ウインナー食べたから…！」

「そんなに食われたくねぇんなら名前でも書いておきゃ良いじゃねぇか」

「黙れェエエエエエエエ！　何お前らは！　いつまで昼飯のこと引きずってるの！　もう二時間過ぎてるんだぞ、今まで何してたんだ！」

とにかく、銀八の一喝が効いたのか、その後二人の暴走はおさまり、結局居残り掃除をすることになった。

002

掃除が終始無言だったのは言うまでもないだろう。

――沈黙は銀八によって破られた。

「よーっし。結構片付いたな。もう遅ェし暗くなったし帰れや」

それだけ言って職員室へ戻る銀八。

言われて外を見ると、日は完全に落ちていた。

「うわ、真っ暗ネ…」

不安げな表情のもと、神楽は言った。

「チャイナ、アンタ家は遠いんですかィ？」

「遠くはないけど…これだけ暗いとさすがに恐いヨ……」

「…じゃあ、送って行きやしょうかねィ」

沖田の言葉に、神楽の表情が明るくなる。

「ホントアルか？」

まるで喧嘩などなかったかのように。

「ええ、さ、早く行きやしょう」

通学路は暗く、足下を照らすのは唯一、街灯だけだった。

「暗いねィ。アンタ、文化祭とかで遅くなったとき、どうしてるんです？」

「銀ちゃんに送ってもらうとか、新八に送ってもらうとかネ」

「…ふぅん」

「ふぅんって何ヨ。自分から訊いたクセに」

「いや、別に？　アンタは俺の気持ちなんて、少しも解らねぇんだろうなと思って」

きょとんとした顔のまま、神楽は沖田の隣を歩く。

不意に、彼が立ち止まった。
驚いた神楽は振り返る。
目を合わせた沖田は、真剣な目をしていた。
「本当に解ってないんですねィ」
ぽつ、とその口から吐き出された。
「俺ァ、アンタのことが」
「！！」
声が出なくなった。
街灯の明かりで見えなかったのだ。
沖田の後ろから、トラックが現れた。

「おきッ――――――！！！」

キキイィィィィイイィィッ

思わず目を瞑った。

一瞬の静寂。

恐る恐る目を開けると、そこにはうつ伏せに倒れた沖田がいた。

003

「沖田ッ……！？」

「――…一命は取り留めたってよ」

集中治療室の前、椅子にも座らずに、銀八は告げた。

「おい、聞いてんの？　神楽」

小柄な身体が余計に小さく見える。

神楽は俯いたまま、膝を抱えて椅子に座っていた。

「……」

「かーぐらァ、そんなに気にすんなって。オメーのせいじゃねぇんだぞ？」

「……」

一向に顔を上げようとしない神楽を見下ろし、吐息を一つ。オレンジ色の髪をサラリと撫でる。

「……生きてるアルか…」

「ん？」

顔を少しだけ上げた神楽の瞳には、涙が溢れていた。

「あいつは、生きてるアルか…？」

「ああ、さっき言ったろ。ちゃんと生きてるって」

「……そっか、良かったネ」

「治療、終わりました。暫くの間、麻酔で眠っていますが…。明日には話せると思いますよ」

治療を終えた医師が銀八の前に現れた。

「私からも話したいことがあります。来ていただけますか」

「……ああ」

「はっ……！？　き、記憶喪失……！？」

銀八は思わず声を上げた。

「はい、自分の存在自体は覚えているのですが、他のことは――」

「…嘘」

「え？」

「嘘アルよ！　そんなことっ……あるわけないネ！」

走り出した神楽が向かったのは沖田の病室。

個室であるのを良いことに、彼女は凄まじい勢いで乗り込んだ。

「おいィィィ！　おめー、何が記憶喪失だァァァ！」

「……ん」

開け放たれていた窓から風が吹き込んできた。
真っ白なカーテンがぶわぁっと舞い上がる。

「あれ……？」

憎まれ口の一つでも叩かれるかと思ったが、彼はベッドで寝息を立てていた。

「沖田…？」

「ん、あ……？」

声が聞こえたのか、彼はゆっくりと起き上がった。

明らかに寝ぼけた目をした沖田は、寝癖の付いた頭で辺りを見回す。
ようやく焦点の合ってきたとき、神楽と視線が絡んだ。

「……」
「何ヨ？」
「……」

「おい、神楽ァ？　お前、病院は走るなって――」

「……誰だよ？」

004

「は……？」

一瞬、時間が止まったかと思った。
神楽も銀八も耳を疑った。
けれど一方の沖田は、いつもの無表情で首を捻る。

「あ、先生、この人達誰なんです？」

「ね？　坂田先生、本当に記憶喪失でしょう」

医者は隣に突っ立っている銀八に向かって言う。

「ね？ってオイオイ…まさか本当だなんて思わねぇよ」

ふと神楽に視線を移す。
神楽は呆然として、足下を見つめていた。

「…なワケない」

「は？」

「んなワケないネ！　演技だろ？　そんな安い三文芝居に付き合ってやれるほど、私は優しくないヨ！」

胸ぐらを掴んで前後にゆさゆさ振る。

「何すんだ、お前、中国人？」

「っ…！」

涙目になりながら、神楽は医者を振り返る。

「…本当アルか？　キオクソーシツって……」

渋面をつくって頷く医者。

「記憶喪失っつーか喋り方も違うよな、これ」

怪訝そうな顔で銀八が肩を竦める。

「何の話してんだよ？　つーか誰、アンタ方？」

「むかつくくれェ飄々と喋りやがるなオメーはいつもいつも」

「だから、『いつも』っていつの話してんです？　覚えてねぇんですよ、俺ァ」

「…さァて、どーしたもんかねェ……」

銀八が天井を仰ぎ見ると、神楽はまた沖田に詰め寄った。

「沖田じゃない…」

「あ？」

「お前、沖田じゃないネ！」
「はァ？　何言ってんだこのチャイナ娘ェ！　俺ァ正真正銘、沖田総悟だ！」

小さく目を見開く。
こんなことを言われたら、そうなんだ、と認めざるを得ないではないか。
記憶喪失なんかでないことを、忘れられてなんかいないことを期待させてほしかったのに。

同時に、思い知ることになった。
幾ら夜兎である自分と張り合うことが出来るとはいえ、やはり沖田は人なのだ。
叩けば壊れる、脆い人間なのだ。
こんな風に、車に轢かれて記憶を何処かへ落としてきてしまうような。

もっとも、車に轢かれて大事には至っていないということが既に人並み外れているのだが。

「…とりあえず、オメー沖田、明日から学校来いよ？　もう大丈夫なんだろ？」
「え、あの、坂田先生？　まだ怪我は完治してないんですけど…」
「あーあー大丈夫です。こいつら馬鹿みてェに治癒能力高いんで。何の心配もいりません」
「じゃあわざわざ病院に来る必要はないですよね？」
「あ、そういえばそっか。良かったなー沖田、神楽、てめーらもう病院に来るこたぁねぇよ」
「てめーは一生入院させてやろうかコラァァァァァァ！」
「止めて下さい、婦長！」

005

「あー痛ェ。ったくよーもう節々が痛くて駄目だわこりゃ。帰ろうかな」

銀八がぶつぶつと文句を並べながら教室に入ってくる。

「あ、おはようございます…って先生!?　何でミイラみたいになってるんですか!?」

新八が驚きの声を上げた。

確かに銀八は左足、右腕を包帯でグルグル巻きにされている。

「いや、これはね新八くん。ちょっと病院に行ったら凶暴な婦長さんに襲われてさぁ」

そこまで聞いたところで、大体の事情は把握できた新八だった。

あの病院には凶暴な婦長がいると恐れられているのだ。事実、新八にもそのような目に遭ったことがある。

「よーしじゃあ連絡から行くぞー。えぇと、沖田が記憶喪失になった。あとはぁ…明日集金日だ。以上。金忘れんなよ」

教室を出て行こうと立ち上がった銀八に、新八が違和感を覚える。
「え？　あれ、先生？　今すごく重大な事をサラッと言われた気がしたんですけど……」
「ん…俺なんか変なこと言ったか？　重大？」
「気のせいかな…いや、でも一応もう一度言ってくれませんか？」
「んだよ、仕方ねぇな。…沖田が記憶喪失になっ――」
「おいィィィィィィィィィィ！　それだよ、それ！　おかしくね？　何でそんなこと、え？　記憶喪失？　え、誰が？　沖田さん！？」
「うるせぇなァ、そーだよ、沖田が記憶喪失になったんだよ」
あくまでも軽い口調に、土方達風紀委員が立ち上がる。
「先生ェェェェ！　どーいうことだよ？　総悟が記憶喪失？　冗談もほどほどに…」
「すいませーん、遅れましたー」
感情の籠もっていない、軽い声が教室に流れ込んでくる。
「……！　総悟…！」
安堵したように土方が吐息をつく。
だが、目が合った沖田は、きょとんとして言った。
「…おはよーございます」
「！！」
「ど、どーした、トシ？」
沖田に挨拶を返した近藤が、目を見開いたままの土方に訊く。
「可笑しい……！　いつもなら真っ先に俺の背後に回り込んで芯を出したシャーペンを構えるのに…！！」

「オメーいつもそんなことやられてんの？」
冷ややかな銀八の声。
「…近藤さん。信じがたいが、総悟が可笑しくなっちまったのは確からしい」
「そ、そんな…」
「可笑しくなったっていうか、記憶喪失なんですけど。つーかアンタの『いつも』が可笑しいですよね」
更に冷ややかな沖田の声。
「その『いつも』を引き起こしてんのはテメェなんだけどな…！」
「トシ落ち着け！　今の総悟はそれさえ覚えてないんだろう？　お前が今キレたって仕方がない」
「…そういえば、チャイナ娘は…」
土方が気付き、辺りを見回すと、不機嫌全開の顔をした神楽が自分の席に座っているのが見えた。
「チャイナ娘？」
怪訝そうな表情を浮かべながら、神楽を見下ろす。
「……お前」
「――――……」
「あれ、そういえばトシ、総悟いつもと違うよな？」
「あぁ？　だから記憶喪失なんだろ？　他に違う所なんて…」
土方は続く言葉を見失った。
ゆっくりと席に着く沖田は、黒縁の眼鏡を掛けていたのだ。
「総悟、目ェ悪かったのか？」

「あ、はい。コンタクトだったんですよ、でもこの前壊しちゃったんで、でも暫くは換えに行けそうにないんで、眼鏡で良いかなと思って」

思った以上に似合っていた眼鏡に戸惑いを隠せない。
同時に、隣に突っ伏している神楽を見ると、何かあったことは明白だった。

「――あ、マヨ、どーだ？　沖田の様子は」

風紀委員の見回りを終え、帰路に着こうとしていた土方を呼び止めたのは、相変わらずやる気のなさそうな銀八だ。
「あ、はい。それが、以前には考えられないくらい働いてて……」
「ふーん、ま、働いてんなら良いんじゃねぇの」
「そんな投げやりな…！　まぁ風紀委員としたら良いことなんですけど。俺としちゃ、気味が悪いんですよ」
「そりゃあ我慢するしかねぇな。すぐに治るってワケでもねぇし、長い目で見るしかねぇだろ」
そう言い残して職員室へ向かっていく銀八。
「じゃーな、さっさと帰れよ」

006

――すごく居心地が悪い、気がした。

きゃあきゃあ騒ぐ黄色い声が耳障りで。

そんな風に騒がれている俺の隣にいたって少しも興味を示さないあの女も。

とても気に食わない。

俺が何をしたというのだろう。

不可抗力で記憶を失い、以前の俺とは別人になったのかも知れない。が。

それは俺のせいではない。はずなのだ。

なのに、何なんだ。この罪悪感は。

――俺は、何か本当に忘れてはいけないことを忘れてしまった気がした。

――そう、あの言葉の続き――

「…サボりアルか」

不意に声を掛けられた。

だが、大して驚く様子は見せず、ゆっくりと起き上がる沖田。

「……お前…何で？」

「何でとは何ヨ？　ここは私の『サボりスポット』ネ。さっさと授業を受けに行くヨロシ」

当然のようにずかずかと隣へ歩いてくる。

沖田は彼女を見上げながら、これまた当然のように言い返した。

「別に俺がどこでサボろうと関係ねぇだろ？　だったら良いじゃねぇか」

「…多串くんみたいな言い方ネ」

「多串？」

そんな奴いたか、と沖田は少し考える。

…結果は「ＮＯ」だ。

「そんな奴いたか？　生憎、同じクラスじゃないと覚えてねぇんだけど」

彼の言葉に、神楽は思わず「はは」と笑う。

「いるアルよ、風紀委員の副委員長ネ」

「…土方？　何、あいつ本名、多串っていうの？」

「そうヨ。土方は芸名ネ」

「へえ、そーかィ。そりゃ覚えておかなきゃなァ」

「……！」

小さく目を見開いた神楽の顔を、沖田はまじまじと見つめる。

「…どーかしました？」

脳裏に揺らめいた彼――記憶を失う前の沖田に、あまりに似ていたから。

答える言葉を拾い逃す。

けれど、神楽が顔を見返した彼は眼鏡を掛けていて、現実に引き戻される気がした。

きっとこの眼鏡は、彼女を過去から引き戻すための装置の役割を果たしているのだろう。

「……おい？」
我に返ったときには、神楽の手に、彼の掛けていた眼鏡が乗っていた。
「あ……！　――ごめん…」
慌てて返そうとする神楽の手を止める。
きょとんと見つめる彼女を見ずに、沖田は空を仰いだ。
「持っててくれよ。たまにはレンズ無しで見ていたい」
そして視線を神楽に向ける。
神楽は心臓が跳ねるのを感じた。
――笑顔を。
沖田が、以前と少しも違わない笑顔を見せたから。
「――お、アンタ、よく見たら可愛いじゃないですか」
「…どーせぼやけてんダロ？」
図星を突かれたと言わんばかりに笑う。
「――けど、解るんですよ」
いつも人をからかうような笑顔で。
「俺の中の何かが、そう教えてるんです」

007

……“Foolishness”

It was said by her with the watery eye.

What she wants to say to me has not been understood.

However, I think that it is true that I had it cry.

「……馬鹿」

「は？」

驚くほか無かった。
神楽が一瞬にして涙目になったのだから。

「馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿」
「おい…」
「馬鹿っ……馬鹿ァ」
「……」

文句を言おうと口を開いたが、彼女が涙を隠すように頭を預けてきたために、黙ることになる。
…と言っても、肩に頭を押し付けられているのだが。

「っ……」

「…この俺が肩を貸してやってるんですよ？　我慢しないでもっと泣いたらどーです？」

「…五月蠅いネ」

憎まれ口を叩きながらも、彼女は我慢するのを止めた。

「ッ――うあぁぁぁぁぁあんっ…！」

「――」

――きっと再認識したのだろう。
俺が、自分の知っている俺ではないことを。
以前の俺なら可愛いなんて言わない、とかそういう次元の話でなく。
『俺の中の何か』に以前の俺が成り下がってしまったことを。

「……アンタ」

「…ん」

一段落した所で言い出す。

「そんなに前の俺が好きなんですかィ？」

一瞬、ぴくっと震えた気がした。

「……分かんないネ」

「…」

「分かんない。前はいなくても良いって、さっさといなくなれって言ってたのに、本当にいなくなった今は……なんて言えばいいか、分かんないヨ」

ふう、と吐息をつく。

「あ、そ」

「いなくて困るとか、そういうんじゃないアル。ただ、何となく……寂しい」

予想外の答えに目を見開く沖田。

そして満更でもないような笑みを浮かべた後、元の無表情に戻って、鳴り始めたチャイムを聞く。

「……あ、授業終わっちゃったネ」

「元々サボるつもりだったんだろ？　じゃあ問題ねぇだろーが」

「私はお前と違うネ。いつもはサボったりしないアル。今日はたまたま、ネ」

「へえ？　何で今日なんだよ？」

「……お前に文句を言いに来たってだけヨ」

「結局文句なんて言ってない」という言葉を呑み込んで、思わず笑った。

それに対する神楽の視線を軽くかわし、彼女の持つ眼鏡をひょいと摘み上げる。

慣れた手つきで掛けると、偉そうに中指で位置を調節したポーズでこう言い残した。

「また文句言いに来いよ」

……「……馬鹿」

涙目の彼女に言われた。

彼女が何を言いたかったのか、俺には解らなかった。

けれど、俺が泣かせたのは事実なのだろう。

008

――違う。と解っていた。

ちゃんと今だって、理解できている。

けれど、何でなのだろう。

あいつの、あの笑顔を見たら、その境界線が崩されてしまう。

だって変わらないんだ。

前と、何も違わない、むかつくくらい眩しい笑顔。

その日、あのサボりの後の授業から、神楽のふて腐れた顔は見れなくなっていた。

数学の時間。
相談しながら問題を解こうとする沖田と神楽を遠目から見つめる男がいた。
…土方十四郎だ。
彼は二人の会話に聞き耳を立てる。
「ん？　ここはどうなるアルか？」
ごく簡単な問題に引っかかり、沖田に説明を求める。
「…ああ。アンタ、こんな簡単な問題も解けないんですかィ？」
「！」
――ガタッ
椅子の倒れる音がした。
「んあ？　どーした土方ァ？　まだ授業中じゃきに、静かにせんか」
「…すみません」
へらへら笑いながら板書していた数学教師、坂本に言われ、静かに席に着く。
――今、確かに。
土方は先程の沖田の言葉を反芻していく。
『こんな簡単な問題も解けないんですかィ？』
――朝は口調まで違ったはずなのに。

そう思い、もう一度会話に集中する。

「……だからYには5を代入するんです」

――あれ、違う。朝と同じ口調になっている。
気のせいだったのか？　いや、それはない。
もしかして、ほんの少しずつではあるが、記憶が戻ってきているのではないか。

たまにではあるが、敬語でなくタメ口で言葉が発せられる。
その言葉達は大体が、以前の彼の口調なのだ。

――何があったんだ？　さっきの物理の授業はサボったよな。
確か、あのチャイナ娘も……。

まさか、と土方は思う。
以前の沖田の中で、存在が最も大きかったのは神楽なのではないだろうか。
だとすれば、彼女との接触で記憶が回復するというのも有り得る話だ。

「……」

ふと、土方は廊下側の窓を見た。
そこには白髪天然パーマの男が突っ立っている。
授業をしに来ているならまだしも、今は数学の授業だ。
完全な部外者とは言わないが、端（ひじかた）から見ていたら不審者だ。

自分のクラスの生徒に不審者と思われている銀八と目が合う。
「……」
ちょこちょこと手招きをした。
土方は坂本の目を盗み、そうっと廊下へ近づく。
「…何してんだよ」
怪訝な表情を隠そうともしない。
「いやー、沖田がさぁ。記憶戻ってきそうだなと思って」
「気付いてたんですか」
驚きの色を見せる。
「だって、ほら、神楽が嬉しそうだから」
彼が指さす先――教室の中には、笑顔を浮かべた神楽がいた。

――区別なんて出来ない。
出来なくなってしまったのだ。
私には、記憶喪失のあいつと同じく、忘れていたことがあった。
…あの言葉の続き。

以前の私には気づけなかった、あの言葉の続きを――。

009

「うわ…傘、忘れたアル」

暗くなってきた窓の外を見て、神楽が呟く。

「は？　アンタ、今日持ってきてたじゃないですか」

沖田が彼女の机の上を指さす。
確かに神楽がいつも持ち歩いている傘があった。

「それは日傘ネ。私お日様に弱いアル」

「へぇ、そりゃあ勿体ねぇなァ」

「…みんな帰っちゃったネ」

今日は居残りではなく、普通に掃除当番だったのだ。
文句をぶつぶつ言いながらも、ちゃんと掃除を終え、帰ろうとした矢先、雨が降り出したのを見た。

「……とりあえず学校出ねぇと。閉まっちまいますよ」
「うん」

下駄箱を漁ると、黒い折りたたみの傘が一つ入っていた。
「あ。傘」
「お前のアルか？」
「ああ。アンタはどうです？　ありました？」
「ううん…やっぱりなかったヨ」
しゅん、と雨に濡れた花のように汐らしくなる。
見かねた沖田は、手に持った傘を差しだした。

「え……でも、これお前の……」

「使えよ」

「それじゃあお前が濡れちゃうヨ！　せめて一緒に入っていくネ！」

返事をせずに、鞄を頭に乗せて走り出す。

「冗談。それは一人用でさァ。汐らしいアンタ、雨に濡らすほど、俺ァ冷たくないですよ」

「……！」
一人残された神楽は、受け取っていた折りたたみ傘を両手で握る。

雑にたたまれた傘には、所々に皺が寄っていた。

「……待つアル！！」

「！　アンタ…」

雨に濡れた沖田を呼び止めたのは、傘も差さずに追いかけてきたのだろう、ずぶ濡れになった神楽だった。

「何してんだ！？　人が折角、傘貸してやるって言ってんのに…！」
「お前の傘なのに私一人が入って行けるわけないネ！」
当然のように傘を突き返すと、沖田は呆れたように笑う。
「…何なんだよ、アンタ、本当にワケわかんねぇよ」
言いながら傘を広げる。

すると、神楽は彼に詰め寄った。

「…？」

「ねぇ、覚えてないアルか？　お前が記憶喪失になる前、言いかけたこと。私、今思いだしたヨ。ねぇ…何を言いたかったアルか？」

彼女の髪も俺の髪も、もうこれ以上受け入れられないとでも言うように、雨の雫を滴らせていた。

街灯だけが足下を照らす、あの道で。

俺は訳がわからないまま、彼女の青い目を見つめている。

———唐突だった。

それが何故今起きたのか、解るはずもない。

ただ、朦朧とする意識の中で、俺はあいつの声を思い出す———

010

冷たく濡れた制服を掴み、縋るように訊く神楽に、何を言えばいいのか解らないまま。

沖田は彼女が何を知りたいのかさえ、忘れていて。

その胸には罪悪感ばかりが滲んでいく。

「……チャイナ、俺……」

彼が紡ぐ言葉の一つ一つに、神楽は神経を集中させた。

その先を、期待しているのが見える。待っている。

きっと彼女は、その言葉の続きが「嫌いなんだ」という否定的なものだとしても、笑顔を見せるのだろう。

ただ、続きが聞きたいのだ。

「まだ記憶が戻ってない身だ。だから前の俺が何を言おうとしたかなんて解らない。…けど……今の俺ァ、アンタのことが」

神楽が顔を上げた。

――思い出せない。
どうしても、思い出せないのだ。
今の俺にはあいつを喜ばせる言葉なんて言えないかも知れない。

けれど、言わなければ。

「俺ァ――――」

――突如、沖田の頭に激痛が走る。

「ッ……！？」

彼はそのまま地面に倒れ込む。

「え、ちょっと……待ってヨ、どうした沖田、頭痛いアルか？」

沖田が頭を抑えているのを見て、神楽が訊く。

「うッ…っ……」

声を発することさえままならない。
何も考えることを許さないような痛みが、ひたすら沖田へ流れ込む。

「ごめ……チャイナ、俺」

「早く、救急車！」

強まる雨脚に、彼の声は掻き消されていく。

「…あ、銀ちゃん！？　サドが倒れたヨ！　頭が痛そうで……うん、早く来て…！」

「チャイナ……好きなんだ」

か細い声が、神楽の耳に微かに届いたようだった。

彼女は耳に当てていた携帯を、全体が水溜まりと化した道に落とす。

「……え？」

神楽が視線を移したとき、既に沖田の意識はなかった。

「ッ…やっぱり、事故って記憶失っただけなんて有り得ねぇんだよ…！」

雨合羽も着ずに職員室を出て行こうとする銀八に、残っていた日本

史教師・服部や理事長のお登勢は声を掛ける。
「どうした？　生徒からの電話だったみてぇだけど……」
「この雨の中、合羽も着ずにどこへ行くんだィ？」
「沖田が倒れたんだ……！　住宅街じゃねぇからよ、俺が迎えに行ってくる」

011

「……何か飲むか？　寒ィだろ」

銀八が、バスタオルを頭から被ってがちがちと震えている神楽を見下ろす。

返事が来ないのが解ってから、自販機の前へ立ち、声を掛けた。

「お前、コーヒー飲めたか？」

神楽は力なく首を横に振った。

「…苦いの嫌いネ」

背を向けた銀八は返事が返ったことに安堵しながら笑った。

「……ほんと、ガキな」

集中治療室の前。
いつかと同じように、二人はそこにいた。
未だ神楽はガタガタと震えている。
寒さで奥歯が噛み合わない。
けれど濡れた髪を拭おうともせず、ひたすら沖田（かれ）の帰りを待つ。

ふう、と溜め息をついてから、銀八は神楽に歩み寄り、彼女の頭に手を乗せた。
「大丈夫だって。あいつァこんなことで死ぬタマかよ？　事故っても死ななかったのに」
「…」
「俺は沖田のことは心配してねぇの。むしろお前の方が心配なんだよ。お前、沖田（あいつ）のこととなると変だから。…頭拭けよ、風邪引くぞー」
しっかりと神楽の頭のタオルを掴み、ゴシゴシと髪を拭く。

それはあまりに雑で乱暴で。
けれど、暖かかった。

「ほれっ、ココアで良いか？　俺が奢るなんて滅多にねぇからなァ。よぉく味わえよ」

銀八から、買ったばかりのココアを受け取る。
息を吹きかけると熱い湯気が顔にかかった。
「…ホントネ。銀ちゃんが人に奢るなんてリボ●ンの雲雀が主人公達と群れるくらいの頻度ネ」
「…ねぇ神楽ちゃん？　それって多いの、少ないの？　ていうかこのシリアスな雰囲気で伏せ字使うのやめよう」

どうやら調子は戻ってきたらしい。
あとは。そう思いながら銀八は集中治療室を見つめた。
ランプが消えるのを待つ――それだけなのに。
待つことが出来るのだろうか、彼女に。
これでもし沖田が命を落とすようなことがあれば、神楽にはとてつもなく重い枷が付けられるのではないか。

耐えられる？　無理だろう。
既に神楽はこの様子なのだ。

生きていろ、と願うしかない。

何時になったのだろう。
辺りは静まりかえっている。
時計を見ると、午後１１時を回っていた。
「…おい、神楽、お前電話はしたのか……？」
振り返ると、彼女はソファにうつ伏せでいた。
ぎょっとして銀八が駆け寄る。
「ちょっ、神楽！？　何でお前まで倒れてんだよ、事故った？　また？」
慌てて呼吸を確かめるが、彼女は正常な呼吸を繰り返していた。
拍子抜けしたように銀八は苦笑する。
「え、何……寝てんの？」
神楽の近くに腰掛け、ランプが消えるのを黙って待つのは、銀八で

も心細いものだった。

「！」

ランプが消えた。

「神楽、神楽っ」
揺り起こすと、神楽はクマの出来た虚ろな表情で、目を擦っている。
解っていると思うが、彼女は寝てはいなかった。
目の下のクマがその証拠になる。
「何アルか、銀ちゃん？」
「お前ね、前から言おうと思ってたけど、一応先生なんだから『先生』って呼びなさい」
「別に構わないヨ。…で何か用アルか」
「俺は構うの。つーかお前、何でここにいるか覚えてるよな？」
「当たり前ネ…沖田は、どうなったアル？」

「今、集中治療室の明かりが消えた。……もうすぐ会えるだろ」

「…坂田先生」

二人は声のする方を見た。
…いつかと同じように、看護師が呼びに来ていた。

「事故に遭ったとき、頭を打っていましたよね。その傷が頭痛を引き起こしたようです」

「は、そんだけ？」
「記憶の辺りに何らかの変化があるかも知れないです」
「…思い出したりするのか？」
「ええ。確率は半々と言って良いでしょう。更に忘れている可能性も捨てきれません」

012

「更に忘れるって…これ以上何を忘れるんだよ？」

その言葉に神楽はぴくりと動く。

「…銀ちゃん、あいつに会ってくる」

「……神楽……」

前のように勢いはなく、憔悴しきった様子で病室へ行く神楽。

そのあまりに弱い背中を見送るのは、辛すぎる。

「……沖田？」

音のしない戸を開け、中を見る。

「……誰です？」

「！」

寝ぼけたような表情でこちらを見つめる沖田。
ショックで、神楽は声が出なかった。
また繰り返すのか、あんなことを。

「おまっ……また忘れたアルか？　許さないヨ…私、絶対…」

泣き出しそうな神楽の声が聞こえたのか、跳ね起きるように布団が動いた。
蹴飛ばされたそれが、ぶわぁっと吹っ飛ぶ。

「え」

沖田が立ち上がっていた。

「さ、ど……？」

「……泣くなよ」

「！」

「……な、んで、記憶が……」

「記憶が戻る前兆？　らしいですよ、あれ。まァ医者も解ってなかったみたいですけどねィ」

あのヤブ医者、と沖田が呟いた。

「ヤブ医者、ネ」

神楽は息を吸い怒鳴った。

「お前、ふざけてんのか！？　シャレになんねーヨ、さっきみたいのは！　本気でっ…ホントにまた……忘れちゃったんだって…」

涙をぽろぽろ落とす神楽に、彼は駆け寄った。

気がつけば、目の前は真っ暗だった。

――いや、照明が消えただとか意識を失ったとかではない。

ただ、単純に光が差し込まないようになった、としか言いようがなかった。

涙は見たくない、と言わんばかりに神楽を抱きしめた。

沖田の腕の中でふるふると神楽の肩が震え始める。

「……待たせたなァ」

「…私、怒ってるアルよ」

「そーすぐに怒っちゃいけませんぜ？　高血圧になります」
「怒らせてんのは誰だヨ」
白い患者用の服を着たまま、沖田は抱きしめる手を緩ませない。
「良いじゃないですか。折角、久しぶりにいつもの俺と話せたんですぜ？　ちょっとくらいドッキリ仕掛けたって」
「…足の骨、折るアルよ」
「あれ、感動しませんでした？」
「――馬鹿」

僅かに開いた戸の隙間から、銀八とヤブ医者は覗き見ていた。
「いやぁ、青春だねェ」
気怠げに言う銀八。
「つーか今、ヤブ医者って言われてなかった？　ねぇ、ヤブ医者って」
「言ってねぇよ。腹ん中じゃあ思ってるかも知れねぇけどな」
「え、思ってるの？」
「あー間違えた。言ってる」
「言ってんの！？」

「！　総悟？」

翌日、目を見開きながら言ったのは土方だった。
「…何です、土方さん？　何度も呼ばないで下せェ。気持ち悪ィ」
「う、うるせーな！　…ていうか、総悟なのか？」
ぺたぺたと沖田の頭を触る。
「気持ち悪ィなァ。それ以上触ったら辞書の角で殴りますぜ？」
音も立てずに辞書を持ち上げる沖田に気付いたのか、土方は我に返る。
「いや、悪ィ。どーも信じられなくて」
「こいつドッキリ仕掛けるアルよ、大串くん」
「マジか」
「おい、何吹き込んでやがるチャイナ」
チャイムと共に、銀八が教室に入ってきた。

そんなこんなで、元通りの生活に戻ったわけなのだが。

忘れていることがもう一つあるのだ。

013

「……ねェ」

「…何です？」

掃除が終わった教室で、神楽と沖田は窓の外を眺めている。
神楽は座っていた机を少し揺らし、身体を沖田に向けた。

「……お前、忘れてるアルか？」

「何を」

訊かれている意味が解っていない沖田は、眉をひそめた。

「お前が言いかけたこと」

「……あ」

「あ、って言ったヨ！　お前っ！　やっぱり覚えてるアルね！？」
「いや…今のは違う……え？　いや俺やっぱり覚えてねぇなァ」
態とらしい演技に痺れをきらし、机から飛び降りて、沖田の胸ぐらを掴んだ。
「言えヨ！　記憶がなかったときのお前じゃ、今のお前の気持ちは解んないネ！」
「……」
自分の髪をくしゃっと掻き上げて、気まずそうな顔をする。
そして、胸ぐらを掴んでいる神楽の手を握った。

「――――――――――ん」

「……確かに今の俺と前の俺じゃ考えてることは違うかも知れねェ……けど」

突然のキスに神楽が呆然としていると。

「今も前も“俺”は“俺”なんだ。惚れる女も一緒だろィ」

「……は」

口が開いたままの神楽は、未だに状況が呑み込めていない。

「…わかりやした？」

「……全然」

もどかしい、と言うかのように、髪を掻き上げる沖田。

「あー…だから、ですねィ」

握った手に、一層優しく力を込めて。

「俺ァ、アンタのことが――――」

最高の笑顔で。

「好きなんですよ」

――これが神楽の念願の言葉だったのは、言うまでもない。

「…またこんな場面に立ち会っちゃったよ、俺」

気恥ずかしそうに溜め息をそっと吐いた銀八だった。

翌日。

「おはよーございます、チャイナ」

「…おはようネ」

神楽が照れ隠しで顔を背け、それを愛おしそうに黒がかった笑顔で見つめる沖田。

二人が並んで教室に入り、誰もそれに違和感を感じないのは何故だろう。

「……そーごっ」

「？　何ですか、土方さん？　おはよーございます」

「おぉ、おはよう…ってそうじゃねェ！　何で俺の」

言いながら指さしたのは、自らの机だ。

「俺のマヨネーズに砂利が入ってんだァァァァ！？」

「そもそも何で机にマヨが常備してあるんですか、多串くん」

「多串って呼ぶなァァァァ！」

「あーうるせェ。おい、そこの猿山のマヨ、黙れ、そして帰れ」

気怠いオーラを纏いながら、銀八が登場する。

「帰れってなんすか。しかも猿山のマヨって、猿山いらなくない？」

「よーし、マヨも黙ったことだし、ロングホームア●ーン始めっぞー」

「先生、ロングホームルームです」

こうして、いつも通りの生活が戻ってきたのだ。

神楽の隣に沖田が歩くのがいつも通りになるのは、そう遠くない未来。

「ねェ、また明日も家まで送ってくれるアルか？」

「何言ってんだよ。当たり前だろーが」

いつもよりも涼やかで心地良い風が、沖田の背中を吹き抜けていく。

彼は静かに願った。

――いつだってアンタの風は俺の背を吹き抜けて、俺の心を連れ去っていくんだ。

勝てる気がしねェ。……だから、せめて俺が死ぬまでは。

「神楽」

その一言で。

俺の背中を吹き抜けて。

終

013（後書き）

次は後書きです。

０００：後書き

…はい。
と言うわけで無事、終わりました、背に吹き抜けるは君の風。
どうだったでしょうか。
いやぁ、前作よりも長かったですね、１話１話が長いですしね
全部読む気になる人っているのかな…なんて心配しながら長い文章を書いておりました。
ここまで読んで下さった方は天使です。ありがとうございます

記憶喪失ものなんて書いたことなくてですね＾＾；
ドキドキしながらだったのですが…
思うようにシリアスにならなかったです
ギャグも少ないし＾＾；　甘くもないしで↑
じゃあ何が良いのよって言われたら、それは読んで下さった方々にお任せします＾＾って事でお願いしますｖ

テーマは「告白」とかそんな風にしたかったんです。
難しいんですよね。

恋の淡さとか、切なさ、もどかしさとか、上手くいくようでやっぱりいかない。みたいな青春を書きたくて。
記憶がなくたって、その相手が運命ならきっと何度でも好きになるんじゃないかと思うんです。
何度でも、何度でも想いは巡って、やっぱり君に惹かれるんだ。って、私がきっといつか感じたいと思う気持ちで。

まあ、今の私じゃいつまで経っても感じられないんだろうなぁ（苦笑
…というわけで、長くなってしまいましたが、言いたいことは前と同じです。

これからも沖神を愛していきましょう！私も愛してます！

また、槻夜を見捨てないで下さい（笑
私はこれからも沖田さんを書き続けます！
また次作も宜しくお願いしますね！

自分に不満はありますが、それでも私は幸せです。
だって、今貴方がこれを読む風が、私の心を揺らすから。

いつだって貴方の風は私の背中を吹き抜けて
！

槻夜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1099f/

背に吹き抜けるは君の風/銀魂/沖神

2010年10月10日13時20分発行